

東京大学大学院教育学研究科
2020年5月 研究科説明会

教育内容開発コースについて

■ 教育内容開発コースの教員

言語教育分野

斎藤兆史 教授

人文社会教育分野

北村友人 准教授

数学・科学教育分野

藤村宣之 教授

芸術教育分野

有本真紀 客員教授

☆3名の専任教員については、それぞれの研究室の紹介資料もご覧ください。

☆それぞれの教員が、分野の区分にとらわれない、幅広く、独自性の高い研究を展開しています。

☆非常勤講師による授業も多数、開講されており、様々な知見や研究の方法論を学ぶことができます。

■ 教育内容開発コースの理念

(研究者養成と実践者養成, 学問の論理を重視しています)

- 学校教育の高度化を実現する教育内容の理論研究と開発研究を推進し, 教科教育に関連する実践的・基礎的研究や教師教育(現職教育を含む)などに関わる**実践的研究者**, および教育内容における高度の専門的知識と教職の専門的見識を兼ね備えた小学校・中学校・高校段階の**指導的教師**を養成する。
- 本コースの特色は, 数学・科学教育, 言語教育, 人文社会教育ならびに芸術教育と身体教育の諸分野の**学術研究と教育の実践的研究を統合する**ところにある。

■ 教育内容開発コースの専門科目(2020年度)

(講義・演習のほか, 事例研究や実地研究も履修します)

- 基礎研究 数学的・科学的思考の発達と学習過程
英語教授法
Education in the Era of Globalization
- 発展研究 国語科教育の理論と実践
民主主義国家と歴史・政治教育
芸術教育の歴史社会学
Research Methods in Education など
- 事例研究 言語教育の事例研究
人文社会教育の事例研究 など
- 実地研究 教科学習の実地研究 など

■ 修士論文のテーマ(2018-2019年度) (幅広く、それぞれの専門性を生かして取り組んでいます)

- ・高等学校英語科授業において「自覚的な音読」を促す要素と効果の検証
- ・Efficacy of PPP Instruction in English Grammar Teaching at One of the Lower Secondary Schools in Nepal
- ・The Use of Literary Materials for Teaching Language in EFL Classrooms in Japan
- ・高等学校における教科内容の枠を超えた国語教育
- ・ルワンダにおける歴史教育とジェノサイド
- ・高校生のグローバル・シティズンシップ形成につながる教育
- ・戦後初期における社会科教育をめぐる議論に関する研究
- ・数学的モデル化におけるモデル選択の根拠の説明を促す授業構成の研究
- ・英語ライティング表現力を育成する小学校外国語科の授業開発
- ・音楽科の鑑賞活動に関する授業実践の心理学的検討
- ・数学にかかわる「活用する学力」の育成に関する心理学的研究
- ・科学的思考力を高める理科授業の実証的研究
- ・生徒の概念的理解を促す高校化学の教材・授業構成について

■ 教員からみた教育内容開発コースの特徴

- ・各教科の教育内容や指導法等に関わる理論的・実証的研究, 総合的な学習, 探究学習やESD等に関わる研究, 比較文化的, 文化人類学的, 心理学的アプローチによる基礎的・応用的研究など広範な研究が進められています。
- ・文学, 言語学, 比較教育学, 教育社会学, 教育心理学など, 学問上の理論・原理や方法論を重視しています。
- ・国内学会や国際学会での発表, 論文投稿など, 学内にとどまらない学術活動, 国際的活動を重視しています。各学会の論文賞なども多くの大学院生が受賞しています。
- ・研究室を越えた院生間の交流も盛んに行われています。

本コースの修士課程・博士課程の大学院入試に合格し、私が指導教員となった場合、どのような形でご指導申し上げるかを理解していただくために、私の研究室をご紹介します。じつを言うと、指導体制の関係もあって、一般的な「研究室」とは形態が違いますが、便宜的にこの言葉を使っておきます。

- (1) 自己紹介：私自身の専門から申し上げておくと、元々は英語文体論という、文学テキストを言語的に分析する学理を専門としてきました。そこからさらに教育的英語文体論に興味を持ち、英語教育の研究を始めました。一方で、20年以上、東京大学教養学部で英語を教えてきましたので、英語教師でもあります。
- (2) 指導学生たちの専門：本コースにおける私の担当が言語教育、そのなかでもとくに教科教育としての英語教育と国語教育なので、基本的にはそのいずれかを専門にしている学生がほとんどです。ただし、私自身の専門からして、圧倒的に多いのは英語教育です。だからといって、英語教育を専門とする学生を重点的に受け入れているわけではありません。
- (3) 論文指導のやり方：基本的には、個別面談で行います。研究、調査、論文執筆がある程度進んだ段階で面談の時間を設定し、論文の進捗状況を確認しながら指導をしていきます。
- (4) 齋藤英学塾への参加：私が総合文化研究科言語情報科学専攻でも兼任教員として指導を行っていることもあり、両キャンパスの指導学生、OB に学内外の顧問の先生方を加えた齋藤英学塾という研究会を定期的で開催しています。個別面談に加え、この研究会への参加を通じて、学術的な世界での発表や議論の約束事、作法などを学んでもらうことができます。
- (5) 指導学生たちの進路：上記英学塾全体を見た場合、修士課程修了後に中高の教員になる人と博士課程に進学し、研究者・大学教員になる（あるいはそれを目指す）人に大きく分かれます。本コースの指導学生の場合は、近年、前者を目指す人が多かったのですが、個人的には、もう少し研究者を目指す人が増えてもいいと思っています。もちろん、教員、研究者以外にも、民間企業、教育機関、放送局などに就職し、それぞれの分野で活躍しているOBもいます。

【研究室で取り組んでいる研究テーマ】

私の研究室では、グローバル化時代の教育のあり方について、国内外のさまざまな事例や、教育をめぐる多様な視点を踏まえながら、幅広く研究を行っています。私自身は、教育の公共性とは何かという問題意識を根底に据えながら、(1) アジアを中心とした途上国における教育の質的向上に関する研究、(2) 「持続可能な開発のための教育 (Education for Sustainable Development: ESD)」を中心に、グローバル市民の育成に関する研究、(3) アジアを中心に高等教育の国際化とその影響に関する研究、という3つの柱を軸に研究を進めています。また、学生たちのフィールドは先進国(日本、米国、英国等)と途上国(モンゴル、マラウイ、ルワンダ、ネパール等)のさまざまな国・地域に広がっており、歴史教育、幼児教育、ESD、市民性教育、公教育の成立史研究といった多様なテーマを掲げて、研究に取り組んでいます。

【人文社会教育】

教育内容開発コースで私が担当する「人文社会教育」という領域は、幅広いテーマを扱うことが可能です。具体的な教科を挙げると、社会科や総合的な学習の時間といった教科が中心にはなりますが、言語教育(国語、英語等)や道徳といった教科を通して、人文社会教育のあり方を考えることも可能です。

【研究指導】

指導学生に対する研究指導は、個別指導とゼミ形式の集団指導を組み合わせで行っています。基本的には、学生の研究の進捗に合わせて個別に面談しながら研究指導を行っていますが、それと同時に、月に1~2回の頻度でゼミを開催し、博士、修士、学部の学生たちが一堂に集い(ときには修了生たちも参加して)、それぞれの研究について発表し、議論するなかで、研究の進め方などについて学び合っています。

【修了した学生たちの進路】

修了した学生たちの進路としては、修士課程に関しては就職(文科省等の官庁、学校教員、民間企業)と博士課程への進学が半々(年によって就職の方が多)ですが、博士課程の修了生たちは基本的に研究職を目指しています。また、個人的には、今後、国際機関等の実務者を目指す学生が増えてくれると嬉しいなと思っています。そうした学生への支援として、国連教育科学文化機関(ユネスコ)でのインターンシップ制度が教育学研究科にはありますし、私の研究室で取り組んでいるユネスコや国連大学、国際協力機構(JICA)等との共同研究にも参加して、経験を積んでもらえればと考えています。

【研究室ホームページ】

私の研究内容の詳細や、ゼミに所属する学生たちの研究テーマなどについては、研究室のホームページ(<http://www.p.u-tokyo.ac.jp/~yutod4/>)を参照してください。

【教員の自己紹介】

人間の「理解」や「思考」のメカニズムに関心があり、教育心理学や発達心理学の領域で研究を進めてきました。具体的には、(1) 様々な教科の学習内容に関連して、子ども（主に小学生～高校生）は概念や事象をどのように理解し、その理解を発達させているか（**認知発達・概念発達研究**）、(2) どのような問題や場面を設定すれば、子ども自らが思考や理解を深めていくか（**個別介入研究**）、(3) 子どもの理解や思考のプロセスには社会や文化によってどのような違いがみられるか（**国際比較研究**）、(4) 子どもの多様な思考は授業場面の他者との関わりにどのように生かされ、その関わりは一人ひとりの思考や理解にどのように生かされるか（**授業過程研究**）、(5) 各教科の授業でどのような学習内容や学習方法を組織すれば、またカリキュラムを編成すれば子どもの理解や思考が深まるか（**実践共同研究**）などをテーマに心理学の方法論による実証的研究を進めています。特に(4)(5)については、各地域の小学校～高校の先生方や自治体の方々と問題意識を共有して実践的な研究を進めてきています。

【研究室の紹介】

研究室の大学院生は、教育に幅広く関わるテーマを設定し、主に心理学的なアプローチで研究を行っています（上記の(1)-(5)に示したような研究の方法論を用いています）。本コースで私が担当する分野の名称は「数学・科学教育」となっていますが、大学院生が研究で関わっている教科は、算数・数学、理科、社会科、国語、音楽、美術、英語など多岐にわたり、さらに、概念的理解、学習観、問題解決などをテーマに、教科を越えて教授・学習や発達に関連する認知プロセスを研究している大学院生も多くみられます。また教科書やカリキュラムの分析などを研究の一部として実施する大学院生もみられます。

研究室の大学院生は、月に2-3回程度、定期的開催される**論文指導ゼミ**（教育内容開発論文指導）に参加し、研究発表と討論を行っています（開催されない週も院生のみで自主的に学習会や読書会などが行われているようです）。対象としているテーマや教科が異なっても、心理学的アプローチとしての研究方法に共通性があるため、ゼミでの検討は各院生の研究に生かされているように思います。以上のゼミと並行して、修士論文、博士論文や各学会誌への投稿論文などについて、教員による個別指導も行っています。

また研究室としては、「概念的理解の深化メカニズム」「本質的理解を促す授業デザイン」などをテーマに、研究室の出身者（他大学の教員）も参加する**共同研究プロジェクト**を継続的に進めており、大学院生もプロジェクトに参加しています。その取り組みを学会でのシンポジウムの開催や研究成果の出版などにつなげてきています。

【大学院生の進路】

修士課程修了者の進路は、博士課程への進学と就職（中学校・高校教員、国家公務員、民間企業（教育・出版関係等）など）とに分かれます。博士課程に進学する者の多くは研究者を志望しており、教育心理学、幼児・児童教育学などを専門とする大学教員として就職しています。